リユース・リデュース・リサイクル

Koushin

50th ANNIVERSARY

光進工業株式会社　創立50周年記念誌

光に向かって進む企業へ

1971-2021

光進工業株式会社

創立50周年記念誌

光に向かって
進む企業へ

～ 題 字 ～

社会福祉法人 北九州障害者福祉事業協会
北九州市立 戸畑障害者地域活動センターの皆さま

50年史発行にあたって

この度、この冊子の表紙にもある通り、弊社は50周年を迎えることが出来ました。貴殿並びに貴社に於かれましては、常日頃より弊社並びに弊社スタッフに対し暖かい、ご支援・ご協力を賜り心より感謝申し上げます。

さて、この50年を振り返ってみると、一言では言い表せられない苦難の連続で、山あり谷ありの本当に大変な50年だったと思います。創業者である、細川勲はここ北九州市には縁も所縁もなく、福井県大飯郡という山深い村で生まれ育ち、中学卒業と共に京都に出てきて、流れに任せて新幹線工事や高速道路工事を手掛けながら南下し、ここ北九州にたどり着きました。そこから今日に至るまで、父・母・叔父は寝る間も惜しんで仕事をし、この会社を精一杯に支えてくれました。そんな創業者へ感謝の気持ちと、これまで光進工業株式会社をお支え頂きました皆様への感謝の思いと、これから一緒に未来を築いてくれるスタッフやお取引先様へ感謝とエールを届けたいと思っています。我々は100年企業を目指し、今後も精進して参る所存です。これからも光進工業株式会社並びに光進グループをご指導ご鞭撻賜ります様宜しくお願い致します。

結びに、創業者である細川勲・文枝、2代目の渡部健治が一生懸命に後世へ残してくれたこの会社を3代目である私は、更に後世の4代目・5代目へ、バトンを繋いでいくことをお誓い申し上げ、この50年史発行に当たってのお礼のご挨拶とかえさせて頂きます。

令和３年４月 吉日

代表取締役　細川　忠広

リユース・リデュース・リサイクル

Koushin

光進工業は常に100%リサイクルを追求した

産業廃棄物の処理、家屋解体業に取り組んでいます

- 環境事業 -

［ 産業廃棄物を100%リサイクル ］

- 建設事業 -

［ 解体業者は選ぶ時代 ］

- 輸送事業 -

［ 企業から一般家庭までどこでも収集 ］

役　員

代表取締役	細川　忠広	監査役	細川　文枝
取締役相談役	細川　勲	監査役	岩本　政明（外部）
取締役部長	細川　千波	監査役	山田　忠政（外部）
会長	渡部　健治	顧問	宮城　義宣（外部）
		顧問	鑓水　裕介（外部）

お祝いの言葉

北九州商工会議所
会頭
利島　康司

光進工業株式会社の創業50周年を心よりお喜び申し上げます。

地球に優しい企業を目指す光進工業が、ここ北九州で、記念となる大きな節目を迎えられたことを大変うれしく思っています。

光進工業は1971（昭和46）年、建物の解体工事を手がける会社として今の小倉北区日明で産声を上げました。以降、産業廃棄物処理事業やルサイクル事業、エコ事業にも業務を広げ、この間、事務所も小倉北区西港町に移り、歴史を積み重ねてこられました。

北九州市は、さまざまな環境政策に力を入れてきたまちですが、光進工業がスタートした1971年当時、日本は公害問題も深刻で、環境庁（現在は環境省）が発足したのもこの年でした。北九州市は公害問題を克服し、環境のまちとしてよみがえりましたが、光進工業はこれと歩調を合わせるように成長を続けてこられました。これは光進工業の経営が、時代を読む確かな目に支えられていたことの表れに他なりません。

光進工業の歴史は解体工事業から始まりましたが、創業者は排出される廃棄物を見て「もったいない。このごみを何かに使えないか」と思い、東京で１台の移動式破砕機を購入したことから、産業廃棄物処理業を手がけるようになったといいます。さらに「廃棄物を処理するだけでなく、そのリサイクル品が新品と同様なら、新品をわざわざ作る必要がなくなる。そうすれば環境保護につながるのではないか」として、廃石膏ボードのリサイクル製品などを世に送り出しました。今でこそ環境保護は常識ですが、私はこうした光進工業の先見性と実行力が、50年の長きにわたって躍進を続けてこられた大きな要因となったと考えています。

躍進を続けてこられた要因は、まだあると思います。それは光進工業が受刑者や障害者を積極的に雇用してきたことです。光進工業は2015（平成27）年、日本の民間企業で初めて、社会復帰を目的にした更生支援寮「陽だまり寮」を立ち上げました。会社案内のパンフレット作りは、障害のある人たちが協力したと伺いました。地球に優しい、とは、人に優しいということであり、それを果敢に実践されてきた光進工業が、キラリと光る北九州の企業群に名を連ねておられることを、私は大変誇らしく思います。

北九州は大きな可能性と魅力を秘めたまちです。それをより確かなものにするのは、光進工業のような、地に足を着け、常に前を向いて進む企業の存在です。50周年を一つの節目として、皆様と喜びを分かち合うと同時に、光進工業が次の60周年、70周年、そして100周年に向かって、北九州のまちとともに元気に成長されていくことを心から願っています。

お祝いの言葉

北九州商工会議所
女性会 会長
深町　宏子

この度は、光進工業株式会社が創立50周年を迎えられたことを心よりお祝い申し上げます。

貴社は、1971（昭和46）年に解体工事業社として創業されて以降、「挑戦する経営、人を生かす経営、顧客重視の経営、公正で開かれた経営」の理念の下、長きに渡り、事業を継続されてこられました。これは、代表取締役社長の細川忠広様、監査役の細川文枝様を始めとする役員、社員皆様方の日々の積み重ねの成果にほかなりません。

現在では、「もったいない」の精神から産業廃棄物のリサイクル事業のほか、建設現場や製造工場などから産業廃棄物を回収する運送業にも事業を拡げられ、さらには造園業や片付け業、障がい者支援事業所運営や非鉄金属買い取り業などにも取り組まれておられます。こうした貴社の「お客様第一主義」「従業員第一主義」の経営姿勢には深く敬意を表します。

加えて新型コロナウイルスの感染拡大で社会に大きな影響が出た時、貴社は失業したり、内定を取り消されたりした方たちを対象に、積極的に雇用することを呼びかけられました。貴社の経営にも影響が及ぶ中でも、細川社長が「困っている人がいれば助けたい」と決断されたとうかがっています。ただただ頭の下がる思いがいたします。

また、監査役の細川文枝様には私が会長を務めております、北九州商工会議所女性会の理事にご就任いただいております。当女性会は1991（平成3）年に設立以来、女性経営者の立場から、北九州市の商工業の改善発展に寄与するとともに、会員相互の啓発と親睦を図ることを目的として活動しています。光進工業の創業期は、高度経済成長期の真っただ中で、細川文枝様は、創業者である夫の細川勲様を家庭と仕事の両面で支えられ、大変な役目を担われたと聞いております。そうした中でも、当女性会の様々な事業への参画、特に2012（平成24）年開催の全国商工会議所女性会連合会北九州全国大会では、多くの時間、労力を必要とする中で、持ち前の明るさと前向きな姿勢でご尽力いただきました。細川文枝様には感謝の気持ちをお伝えすると共に、そうした人となりが光進工業の躍進の要因になったと確信しております。

最後になりますが、創業50周年という大きな節目を契機に、より一層のご発展と皆様方のご活躍を祈念致しまして、お祝いの言葉とさせていただきます。

お祝いの言葉

株式会社西日本シティ銀行
取締役頭取
谷川　浩道

このたび、貴社が創業50周年を迎えられましたことを心よりお喜び申し上げます。また、日頃より、弊行をご愛顧賜っており、役職員を代表して厚く御礼申し上げます。

顧みれば、昭和から平成、令和へと元号が移り変わる中で、わが国は戦後の高度経済成長を経て、二度にわたる石油危機、バブルの崩壊、リーマンショックなど、幾多の経済的困難に遭遇してきました。そうした中、貴社はさまざまな事業を展開しながら、半世紀もの間、地域経済に積極的に貢献してこられました。会社の礎を築かれた細川勲相談役、その事業をさらに発展させられた細川忠広社長の経営手腕並びに社員の皆さまの弛まぬご努力に心から敬意を表する次第です。

現在、貴社は、エコアクション21をはじめ数多くの認定を取得しながら、「リユース・リデュース・リサイクル」の３Rの精神をもって、限りある貴重な資源の再利活用に精力を注いでおられます。

弊行も、かねてより、創業支援や環境関連融資等の本業ビジネスを通じて、地域の産業と雇用の創出、循環型社会の形成など、地域が抱える課題の解決に積極的に取り組んでまいりました。最近は、ESG（環境・社会・ガバナンス）を推進し、2015年に国連が示したSDGsを達成すべく鋭意努めているところです。

貴社と弊行は、業種は異なりますが、同じ目標を掲げ、その実現に邁進する、いわば同志です。弊行は志を同じくする者として、これまでと同様、貴社の事業の発展とその目標の実現をお手伝いしてまいる所存です。

今日、新型コロナウイルスが世界中に蔓延し、わが国でも国民の健康・安全と経済活動が著しく脅かされています。そうした中で貴社は創業50周年の節目を迎えられたわけです。今、経済人に求められているのは、そうした困難を乗り超える知恵と胆力です。私は、貴社が、これからもあらゆる試練に打ち克ち、さらなる成長を遂げていかれることを強く確信いたしております。

どうか皆さま、地域のために一層ご活躍ください。併せて、貴社の益々のご発展と役職員の皆さまのご健勝をお祈り申し上げます。

お祝いの言葉

株式会社なかやしき
代表取締役社長
中屋敷　善三

この度、光進工業株式会社様におかれましては、めでたく創立50周年をお迎えになられたとのこと、ご同慶の至りに存じ、衷心よりお祝い申し上げます。

ご創業以来、幾多の荒波を乗り越えられ、記念すべきこの日をお迎えになられたのは、ひとえに創業者である細川相談役並びに渡部会長、そして細川社長様はじめ社員の皆様方の日々のご研鑽の賜物と拝察いたしております。私共も御社とはこれまで永いお付き合いをさせて頂き、解体工事や産業廃棄物処分などに於いても多大なる協力を頂き改めて感謝申し上げます。これからも末永くお付き合い頂ける事を切に願っています。

思い起こせば、創業者である細川相談役とはもう40数年のお付き合いになります。まだ20代若しくは30代だったかもしれませんが、とにかくまだ若々しかった細川社長（現相談役）は本当に勢いがあり、弊社の受注した解体仕事は全て光進さんに依頼していたように思います。そして、当時では珍しい解体重機を常に揃えられ、細川社長（現相談役）が目をキラキラ輝かせてその機械性能や能力などを熱く説明をしてくださった事を昨日の事のように思い出されます。今は、お互いに環境も変わり会社の体制も変わりそれぞれに年を取った事だと思いますが、それでも後世の方々にこの関係が絶えることなく引き継がれて行き、新たに今後60年、100年と永いお付き合いになってくれることを願っています。

弊社もまた、微力ながら尽力してまいる所存ですので、今後共末永く、ご厚情ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

結びに、光進工業株式会社並びに光進工業グループに関わる全ての皆様の今後益々のご繁栄とご多幸を心よりお祈り申し上げます。50周年本当におめでとうございます。

歴代社長

目　次

第１章　創業1971年・50年の軌跡 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
第２章　臥薪嘗胆（がしんしょうたん）の先にあるもの ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14
特別章　光進工業を支えた女性たちの想い ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 17
第３章　お客様第一主義・従業員第一主義 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 22
第４章　NEXT50 ・・ 26
第５章　社員より光進工業へメッセージ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 28
資料編　（グループ企業） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 34
物故者を偲ぶ ・・・ 40
編集後記 ・・ 42

【凡例】 1. 本書の記述は原則として 2021(令和3)年4月までとした。
2. 用字用語は常用漢字、現代かなづかいによったが、慣用句、専門用語などには、これによらないものもある。
3. 年号は西暦と和暦を併記し、一部西暦のみとした。
4. 引用文は、原則として原文どおりとした。
5. 人名、会社名、地名などは、原則として新字体を用いた。
6. 原則として、会社・団体名・役職は当時の名称を用いたが、これによらないものもある。

第１章　1971（昭和46）年～

創業1971年 50年の軌跡

創業者 細川 勲

ごあいさつ

早いもので、光進工業を創業して50周年を迎えます。社長時代は、「仕事だけは絶対に切らしてはいけない」という思いで、仕事が終わると、毎日、その足で営業して回ったものです。ただがむしゃらに働いてきましたが、その間、たくさんの出会いがあり、たくさんの方に助けていただき、ここまでくることができたと感謝しております。また、社員の皆さんにも恵まれました。ありがたいことです。

これからの光進工業は、社長たち次の世代が時代や地域社会に求められる会社へと成長発展させてくれものと信じております。

経　歴

1944（昭和19）年	福井県大飯郡に生まれる
1959（昭和34）年	中学卒業後、京都の薬局に就職
	その後、運送業や土木業に携わる
1970（昭和45）年	北九州市小倉区（現小倉北区）へ
1971（昭和46）年	光進工業を創業
1978（昭和53）年	光進工業株式会社を設立、代表取締役に就任
2003（平成15）年	代表取締役会長に就任
2008（平成20）年	取締役相談役に就任

第1章 創業1971年・50年の軌跡

福井県から北九州市へ
解体工事からリサイクル事業に参入

中学卒業後、一人で京都へ

まだ戦後まもない時代のこと。福井県南西部の山間部に名田庄村（現・大飯郡おおい町）という村があった。村を通る周山街道は若狭と京都を結ぶルートの一つで、かつては魚介類や塩がこの道を通り運ばれていた。陰陽師の安倍晴明ら安倍氏の子孫である土御門家が、京都からこの地に移り陰陽道の流れを受け継いでいることでも知られている。

この名田庄村から藁草履を履いて山道を歩き、1里半（約6キロ）離れた中学校まで通っていた少年がいる。光進工業株式会社の創業者・細川勲である。幼いころから、かなりのガキ大将だったようだ。

「あの当時はズックも何も売ってないから、みんな下駄か草履でした。高校へ行こうにも、村から40キロくらい離れている。だから、同級生で高校へ行ったのは郵便局長の息子だけですよ」

勲は、そう当時を振り返る。中学校を卒業した勲は村を離れ、仕事を求めて京都へ出ることにした。父も母も働くのに一生懸命で、見送る暇はない。たった一人きりでの旅立ちとなった。

「おふくろが小さな袋を作ってくれて、その中に下着をちょこっと入れて…。荷物はそれだけでした」

京都に着いたものの、あてはなく、頼る人もいなかった。まずは寝る場所を探さなければならない。持っていた新聞の求人欄を調べてみると、「住み込み可」と書かれた薬局の求人を見つけた。それが、勲にとって初めての仕事となる。

中学校は出たものの、片仮名が読めなかった勲に、一人の先輩が「俺が教えてやる」と言って、毎晩3時間、布団を並べて片仮名やそろばんを教えてくれた。

1年ほどたち、大体のことができるようになると、今度は欲と好奇心が出てきた。ほかの世界を見てみたくなったのだ。いろいろ教えてくれた先輩に相談すると、「そりゃあいい」と背中を押してくれた。

京都でできた友達を頼って転職したが、そこから運送屋の助手、マネキン制作会社など5〜6社を転々とすることになる。

大型免許を取得し、東へ西へ

「そうこうしていたら、ちょうど18歳になったので、これは免許が取れるなと。あの時分は自動車学校がない時代でね、試験場に直接行って練習するんです。30分間で70円。それで、その日のうちに一発で取れました。それも大型免許。手書きの免許証でね、今でも番号を覚えていますよ。3700番でした」

このとき大型自動車免許を取得したことが、後の光進工業の誕生へとつながっていくことになる。

勲はまず日本通運へ行ってみるが、「うちは近い所ばかりだから、若い人は続かない」と言われ、次に西京運輸を訪ねて採用される。ここでは、京都伏見で造られた月桂冠などの日本酒を、毎日、東京まで運んでいた。

3カ月ほどたったときに、「京都でタンクローリーに乗らないか。給料も倍出す」と誘われる。

「タンクローリーに乗って、西は広島や山口県の岩国まで、東は静岡まで行ったもんです。そうこうしていたら…」

ここでまた、別の知り合いから「東京オリンピックを見に行かないか」と誘われる。1964（昭和39）年のことだ。もちろん、ただオリンピック観戦に行くわけではない。これも仕事の誘いだった。川崎大社の近くにあるいすゞ自動車の川崎工場から出来立てほやほやのトラックを日本全国に運ぶ仕事だという。お金を払わなくても、マラソンなどただで見られるオリンピック競技はあるというわけだ。それに、いすゞ陸送の社員の家に泊めてくれるというので、住む家を借りる必要もなかった。

勲が過ごした京都の街並み

20歳になっていた勲は心機一転、京都を離れる決心をする。

「陸送と言うのは、仕事に出るときに、伝票と一緒に食事代と燃料代、それに帰りの汽車賃を入れた封筒をもらうんです。一番遠くは鹿児島まで行きました。それも、36時間で行けと。高速も何もない時代で、国道1号線は半分くらい舗装していた。2号線なんて舗装していたのは街の中だけ。そんな道をとっとこ走って行って、36時間で着きました。そうしたら、先方の会社の人が時間通りに来てくれたと喜んでね、お風呂から食事から全部世話をしてくれました。行かなかったのは、当時、米軍の統治下にあった沖縄と壱岐・対馬くらい。佐渡島にも北海道にも行きました」

しかし、ここも勲にとって安住の地とはならなかったのである。

「あの当時は、商売する人は学校を出てから何回も何回も仕事を変わっていますよ。今みたいに情報がないから、何がいいか分からんじゃないですか」

勲は再び京都で働くことになる。

その後の人生を決める出会い

後に妻となる文枝と出会ったのは、まもなく22歳になろうとしていたときのことだ。勲の妹が京都の西陣で帯の型彫りの仕事をしていて、文枝もそこで働いていた。

やがて、1970（昭和45）年開催の大阪万博に向けて、会場の建設工事が始まると、勲も間組から工事に入った。その後、京都で土木の仕事をしていたが、万博が始まれば大阪や京都には世界中から大勢の人が訪れるということで、開催期間中の道路工事などは一切禁止となった。

仕事がなくなった勲は、間組が中国自動車道の下関―美祢間の建設工事をやっていると聞き、間組を訪ねた。すると、「今日からでもいいから、やってくれ」と言われ、下関へと向かった。

1974(昭和49)年 八幡区役所
クローラークレーンによる解体

「下関の、関門橋を越えた所の両サイドは、以前、山だったんです。それを削って道をつくらないといけない。7カ所ほどあったかな。あの当時はユンボなんてなかったから、コマツに言ったらすぐにブルドーザーを持って来てくれました。ブルドーザーに乗る人は、まだあまりいなかったでしょうね。それで、1年弱かけて道をつくりました」

そこでの工事が終わると、引き続き、「美祢の方まで仕事があるから来てくれ」と言われたが、「こんなことばかりしているのは嫌だ」と思った勲は、すでに結婚していた妻の文枝の故郷である北九州市の小倉へ行くことにした。1970(昭和45)年のことだ。

時を得るとは、まさにこういうことをいうのだろう。当時、小倉のまちでは、1975(昭和50)年の山陽新幹線全通(新大阪―博多)に向けて、小倉駅前一帯の再開発を行っている最中だった。

「小倉のまちを歩いていたら、どこのビルもみな『解体します』と書いてあるんです。新幹線を通すのに、まちの中は古い建物ばかり。もっときれいにしようということだったんでしょうね」

しかし、解体工事を請け負う業者がなかなかいない。そこで、勲は手を挙げ、千葉の日立にいる知り合いに頼んで解体工事に必要な機械を送ってもらった。

「機械に、そろばん玉のような形をした鉄の球を作ってもらって取り付け、その球を横叩きにすると、角があるから余計壊れるんです。珍しいものだから、道路を通る人からタクシーまでみんな停まって見物していましたよ」

それまで、ビルの解体工事はハンドブレーカーという手持ち式の機械を使うことが多く、ビル1棟を壊すのに半年ほどかかっていた。それが、勲の手にかかるとわずか1カ月ほどで終わる。そのため、次から次へと依頼が舞い込み、砂津から百貨店の井筒屋辺りまで建ち並んでいた古いビルのほとんどを解体することになった。

光進工業の創業から転機まで

千葉から機械を送ってもらった際に、「個人で解体工事をやるわけにはいかない」と、有限会社をつくった。こうして、今からちょうど半世紀前の1971(昭和46)年、光進工業は北九州市小倉区日明で産声を上げたのである。

2年後の1973(昭和48)年、建設業許可を取得。仕事は順調で、1978(昭和53)年には光進工業株式会社を設立した。やがて、転機が訪れる。

1977(昭和52)年頃
三菱 MS120 油圧ショベルを新車購入

1988(昭和63)年11月　新社屋落成

「今から30年少し前になるでしょうか。ビルを解体したらコンクリートのガラとか木屑とかいろいろな廃材が出ます。その当時は、みんな海に投棄していたんですが、それにもお金がかかる。第一、捨てるなんてもったいないじゃないですか。それで千葉の日立にいる知り合いに電話して、そっちではどうしているのか聞いたら、今はキャタピラにクラッシャーというのを付けて割っていき、バラス(砕石)を作る機械があるというんです。ただ、九州にはまだ出していないというので、こっちで探して買いました」

その機械で、これまで捨てていた解体廃材をバラスにし、解体工事現場にまいたり道路の下地に使ったりしてリサイクルしようというのである。

文枝によると、勲のやることはいつも突拍子もないという。この機械を購入してきたときも、値段を聞いて、あまりの高額に思わず叫んだそうだ。しかし、当の勲は、「今からはこれがいると思うけ、ちょっと買ってきた」と飄々としている。文枝が、「大根買うんやないんよ」と言い返したくなったのも無理はない。「稼げば払える」と言って、勲は実際、稼げるような会社をつくっていった。勲には、時代の先を読む力と決断力があり、そんな勲を文枝はしっかりと支えた。二人三脚で、とにかく朝から晩まで働き詰めの毎日だった。「大変だったけど、楽しかった」と、文枝は当時を振り返る。

しかし、まだリサイクルという意識がほとんど浸透していない時代のこと。周囲からは、「おかしいんじゃないか」と奇異の目で見られた。文枝は会社を手伝ってもらっていた友人(金子マユミさん)と二人で、手作りのチラシを持って、「ただでいいから使ってください」と営業に回った。そんな時代が2年ほど続いただろうか。

1993(平成5)年
ガレキ類 リサイクル工場 開設

2001(平成13)年
《九州初》廃石膏ボード リサイクル工場 開設

解体業とリサイクル事業の2本柱

最初に、リサイクルのバラスを使ってくれたのは三井ホーム(株)だった。「これはきれいでいい」と好評で、そうなるとあとは早い。住友林業(株)、大和ハウス工業(株)、積水ハウス(株)など大手の住宅メーカーがこぞって使ってくれるようになった。

また、道路の下地に最適ということで、道路工事に使用されるケースも増えていく。

当時、市内にコンクリートバラスをつくれるところはほかになかった。今では当たり前になったリサイクル事業にいち早く目を付けた勲の時代の先を読む力が、光進工業のその後の方向性を決めたと言ってもいいだろう。

こうして、
光進工業は解体業とリサイクル事業の2本柱で事業を展開していくことになるのである。

→ 第2章「臥薪嘗胆の先にあるもの」へ

第2章 2003（平成15）年～

がしんしょうたん

臥薪嘗胆の先にあるもの

2代目社長 渡部 健治

ごあいさつ

「光陰矢の如し」。光進工業の50年をたとえるなら、この格言が一番当てはまるような気がします。これまでの50年間を思い起こせば、喜びも悲しみも、苦労も楽しかった出来事も、まさに瞬く間の出来事のように感じています。今、光進工業の50年史をお読みいただいている方々、人生の一日一日を有意義に楽しく過ごしていただくとともに、周りの人々に感謝の気持ちで接していただきたいと切に願っています。

50年の経験を生かし、時代の先を見据えて進み続ける光進工業を、これからもどうぞよろしくお願いいたします。

経　歴

1951（昭和26）年	福岡県小倉市（現北九州市）に生まれる
1976（昭和51）年	福岡大学 経済学部を卒業
1977（昭和52）年	光進工業株式会社に入社
2003（平成15）年	代表取締役に就任
2008（平成20）年	会長に就任
2015（平成27）年	秀健商事 代表者に就任

第2章 臥薪嘗胆の先にあるもの

苦労しながら学んだ経験を成長の糧に

2003（平成15）年、創業者の勲は社長の座を退き、代表取締役会長となった。その跡を継いで2代目の社長に就任したのが渡部健治である。

健治は文枝の弟で、地元の小倉工業高校の機械科を卒業後、関東の会社に就職した。しかし、「苦労して勉強したい」という気持ちが強くなり、1年で退職。読売新聞の奨学生制度を利用して、福岡市にある福岡大学の経済学部に進んだ。

「毎朝3時くらいに起きて朝刊を配り、終わったら朝食を食べて大学へ行き、勉強するんです。大学から戻ったら、今度は午後3時くらいから夕刊の配達へ向かう、こんな生活を4年間続けました」

ただ、当時の読売新聞の奨学生の仕事はそれで終わりではなかった。新聞購読料の集金や読者獲得のための営業もやらなければならない。特に営業は大変だった。1軒1軒、飛び込みで、『新聞をとっていただけませんか』と勧誘して回るのだが、もちろんそう簡単にはいかない。しかし、健治は福岡市中央区でトップセールスになり、表彰されたこともある。

「結構、自信になりましたね。集金のほうでも、お客様の都合に合わせて集金するということや、お金の大切さを勉強させていただきました。『若いころの苦労は、お金を払ってでもしろ』という言葉がありますが、本当にそのとおりです。思い返せば、辛かったこともすべていい経験になっているし、現在の仕事にも役立っていると思います」

大学を卒業して1年間、民間企業で働き、その後、光進工業に入る。法人化して株式会社となる前年のことだ。そこからは姉夫婦とともに、朝から夜まで、とにかくよく働いた。

2代目社長として発展期を牽引

リサイクル事業の業績も順調に推移していた2003（平成15）年。専務として、主に解体工事の現場管理や北九州市の公共工事の管理などを行っていた健治に、「次期社長に」という打診がある。「今、この時期でなければ受けられないだろう」と考えた健治は、引き受けることを決意した。

会社のトップになると、責任感も違えば、求められるものも違う。仕事も、お金も、人（社員）の心も管理しなければならない。それは、想像以上に大変なことだった。

「トップには、やはり人を引き付ける力というのが大事だと痛感して、それこそ寝る間も惜しんで仕事をしたという感覚が残っています」と、当時を振り返る。

この年、光進工業は北九州市から産業廃棄物処分業優良業者として認定された。創業者の勲から会社の経営を託された健治は、まさに発展期にあった光進工業をなんとかその状態のまま維持していかなければ、という気持ちで一日一日を過ごしたという。

2003（平成15）年
産業廃棄物処分業
優良業者に認定

2006（平成18）年
廃石膏ボード2次製品が
北九州市環境自慢に認定

2代目社長としての覚悟は業績にも表れ始める。2004（平成16）年、勲が社長時代に開設していたガレキ類と廃石膏ボードのリサイクル工場に続き、廃プラスチック・紙くずのリサイクル工場を開設。翌2005（平成17）年には発砲スチロールのリサイクル工場を開設した。

ちょうどこのころは、住宅メーカーが躍進した時代でもある。新築に建て替えるために、古い住宅の解体工事が必要となる。健治は、積水ハウス（株）、ミサワホーム九州（株）、三井ホーム（株）、大和ハウス工業（株）といった大手住宅メーカーを担当し、協力会社10社ほどを使って、最高で1年間に365棟を解体した。1日1棟、解体した計算になる。

「今考えると、大手住宅メーカーのピークの時代が段々過ぎて、いろいろな意味で会社も様変わりしたかなと思います」

粉砕機

圧縮処理機

2004（平成16）年
廃プラスチック・紙くず リサイクル工場 開設

破砕・減容

2005（平成17）年
発泡スチロール リサイクル工場 開設

「格言の社長」として「いい言葉」を発信

一方、社内での健治には別の顔があった。「格言の社長」という別名が、健治の人柄を物語っている。

「毎日、テレビや新聞でたくさんの格言を目にするうちに、『これはいい言葉だから社員の皆さんにもぜひ伝えていきたい』と思ったんです。毎週の朝礼や月単位の朝礼、4月の期首などに、『この格言を皆さんに捧げるので聞いてほしい』ということで、心に響く格言や人生の指針となる格言を紹介してきました」

苦しいときや迷ったときなど、人は「言葉」に勇気づけられたり、救われたりすることがある。社員には、そんな「言葉」を持っていてほしいという思いからだった。

その後、会長となってからも、光進グループの社内報に、今度は「格言の会長」として「いい言葉」を紹介し続けた。

ちなみに、自身が好きな格言として挙げたのが、「苦労は知恵の源」である。

「自分の身に降りかかってくることの中には難しいこともありますが、それを何とかしようすれば、いろいろな考えが頭に浮かんで、打開していくことができます。苦労があるから、人は考える。苦労がなければ、考えることもありませんからね。この言葉は、自分の座右の銘の一つです」

健治は、新聞配達をしながら学んだ大学時代から、苦労をいとわず、それをプラスに転化してきた。さらに、会社のトップとして歩んできた5年間で再認識したことがある。それは、自分一人の力では乗り越えられないことも、全社一丸となってみんなが力を合わせれば乗り越えられるということだ。

2008（平成20）年、健治は会長となり、勲の長男である細川忠広が3代目社長に就任した。

光進工業は、次の世代へと引き継がれることになる。

→ 特別章「光進工業を支えた女性たちの想い」へ

～ 特別章：スペシャル座談会 ～

光進工業を支えた女性たちの想い

細川 千波 CHINAMI HOSOKAWA
細川 文枝 FUMIE HOSOKAWA
渡部 朱美 AKEMI WATABE

特別章：座談会　光進工業を支えた女性たちの想い

感謝と思いやりの心を大切に

―「社長の妻」として苦労したこと

文枝　私は、光進工業株式会社という法人になるまでは、本当に「個人商店の母ちゃん」という感じだったんですよ。それが株式会社になったとき、社長の奥さんという立場になった以上は、これはもう勉強しないといけないなぁと思って。なにしろ請求書を書いたこともないし、もちろん重機になんて乗ったこともないから、主人が乗り方を教えてくれて。

朱美　私が40年前に結婚したときは、もう乗っていましたよね。お義兄さんは本当に社長という感じで、それを横でお義姉さんがガッチリ支えていて、その中でうちの主人がフワフワッという雰囲気でね(笑)。「3人でバランスよくやっているのよ」とお義姉さんから聞かされたとき、本当にそうだなと思いました。

千波　確か、重機に乗ったのは女性で初めてだったんですよね。

文枝　そう。向いていたんでしょうね。それから、31歳で初めて経理学校に行って、60歳の声を聞くまでずっと勉強していたと思います。きっかけは、火傷。会社を始めて3～4年目で火傷をしたでしょ。それで、主人に迷惑をかけたというより、邪魔にならないために何をしたらいいかと考えたら、守ることだった。自分は稼ぐことはできないけれど、守ることはできる。じゃあ、守るためには何をしたらいいか。経理や労務の勉強だけじゃなく、重機のことも実務のことも、いざというときに自分ができれば役には立つかなと。とにかく、主人について行くのに一生懸命でしたね。今の私をつくってくれたのは、間違いなく主人なんですよ。

細川 文枝（光進工業 監査役）
創業者 細川勲の妻であり、共に光進工業を作り上げてきた立役者である。

千波　主人が社長になって、私が経理を任されるようになったときに、お義母さんから言われましたよね。「自分がきついときは、相手(主人)の方が倍きついんだということを理解しないと、絶対に会社は大きくならないよ」って。

文枝　主人が社長であれば、いかに主人が外で羽ばたけるか。そういった環境をつくってあげるのが妻じゃないかなと思いますね。ただ、たまには自分の体もメンテナンスしないとね。痛いとかきついとか言わないように、私は自分の体をメンテしながら動いているわけ。体がきつかったら、イライラするでしょ。

朱美　そうそう。

文枝　イライラしたら、なんでも人のせいにしたくなる。物事を人のせいにしたらダメなのよ。自分が悪いからこうなるんだと、自分を批判できる自分でいないと。

細川 千波（光進工業 取締役部長）
3代目社長 細川 忠広の妻、リーマンショック後の会社の危機も夫である忠広を強く支え続けた。

朱美　うちは、主人がどちらかというと何も言わないタイプでしょ。仕事のことを知らない外部の私から、いろいろ言われても嫌だろうし。なので、社長の奥さんとしての役目は何もしていなくて、本当に「見ざる、言わざる、聞かざる」に徹してきたかな。でも、あの方はやっぱりすごいな、偉いなと思いますね。超ストイックだから、自己管理はすごいですよ。

文枝　健ちゃんは、本当にちゃんと自己管理できているよね。自己管理ということでは、寮生にもいつも、「順番をまちがえないように」と言っています。しないといけないこと、した方がいいこと、したいこと、この三つの順番を間違えて、したいことを先にして、しないといけないことを後回しにする。そうやって人生、間違えるんだから。朝起きたときに、自分がしないといけないことは何なのか、した方がいいことは何なのかを考えないとダメ。仕事の仕方も一緒で、この順番を間違えないようにしていれば、私も火傷をしなかったんですよ。

千波　私はサラリーマン家庭で育って、いずれは社長の妻になるというのは分かっていたけれど、実際になってみると、どうしたらいいのか分からなくて…。やっぱりいつも、お義母さんに聞いてしまうんですよ。私の場合は、聞ける人がいるからいいんでしょうね。

文枝　忠広が社長になったときに言われたんですよ。「会社にはあれだけお金をかけているのに、何も資産を持っていないなんてびっくりした。うそやろう」って(笑)。会社が回って、従業員のみんながやっていけたらいいんだから、自分が資産を持つ必要はないという考え。なので、自宅以外、個人資産は持ってないのよ。

朱美　それは私も主人から聞きました。千波さんに、「びっくりした」って言われたって。主人は、「それは当たり前じゃない。そんなもんよ」って言ってました(笑)。

文枝　それで、千波さんに聞いたよね。「小さいころから付き合っていて、細川のおばちゃんは貧乏って思った？」。すると、「いいえ、すごく金持ちと思っていた」という返事が返ってきたから、「そうでしょう。お金はなくても、金持ちの顔はしておかないといけないよ」ってね(笑)。

千波　それは常に言われてますね。

文枝　主人にも、「お金がない、お金がない」とは絶対に言うなと。それが鉄則かな。

渡部 朱美
2代目社長 渡部 健治の妻。光進工業の発展期を温かく見守った。

― 従業員の皆さんへの想い

千波　従業員の皆さんは、自分たちに一番近い存在でもあるし、当たり前のことだけど、従業員の皆さんがいないと会社は成り立っていきませんからね。自分がこういう立場でいられるのも従業員の皆さんのおかげ。感謝しかありませんよね。

朱美　昔から見ていて、従業員をすごく大事にしている会社だなと思っていました。本当に偉いなぁと。それは、今の忠広社長にも受け継がれていますよね。

文枝　私は千波さんにも感謝してるのよ。正月に従業員を家族同様、家に迎えるというのは、今の時代、どんなに社長がやりたくても、奥さんが「いや」と言ったら終わりなんですよ。いつも言っているけど、「子どもが来ない家、人が来ない家はダメよ」って。会社も同じ。ずっとそういう会社であってほしいというのが願いですね。

千波　はい、分かりました。

文枝　私は今、寮の管理人をしているので特にそう思うのかもしれないけれど、みんな平等だから、何かするときは一緒にしよう、おいしいものを食べるときは一緒に食べようって。従業員の皆さんに対しては、もう家族的な思いしかないですね。息子は、「俺以上に息子みたい」と言うんだけど、それくらい全員を子どもと思っているので、ケガをさせたくないし、病気もさせたくない。とにかく、元気な体、元気な精神でいてほしいと思いますね。

― これからの光進工業に望むこと

文枝　その時代、その時代で生き残っていける企業には、先を見据える力が必要でしょうね。ただ、どんなに機械が進歩しても、人の手、人の心以上の機械はないと私は思うので、そのことが分かるトップがずっと続いてくれていったらいいなと思っています。

朱美　そうですね。初代の社長、うちの主人、それから今の忠広さんは、従業員の皆さんにも本当に優しいですよね。それに、忠広社長は若いですから、柔軟にいろいろ起業していっているのを、遠目から「やっぱりすごいな、若い人の発想だな」と感心して見させていただいています。

千波　この先、60年、70年と続けていきたいという社長の夢を叶える手助けを、少しでもできればいいかなと思っています。

文枝　従業員全員とは言わないまでも、全員に近い人たちに、「光進工業の社員でよかった」「定年まで働こう」「定年過ぎても働ける間は働こう」と言ってもらえる会社であってほしいですね。

千波　頑張ります！

文枝　寮生に対しては「自立」ですね。自分で自分のことを管理して自立できる寮生が一人でも育っていって、「母さん、俺結婚するよ」とか言ってくれるようになったらうれしいな。それからもう一つ、人を思いやれる心を持った人を育てていってほしいし、そういう人に育ってほしいですね。

朱美　やはり思いやりは大事ですよね。お互いが助け合う会社というのは発展していくんじゃないでしょうか。ますますの発展を、忠広社長と千波さんたちにお願いしたいと思っています。

文枝　これは息子から教えてもらったんですけど、何かを教えて、その人ができないときは、自分の教え方が悪い。その人が悪いんじゃなくて、自分が悪い。我を責めよということを、我が息子から教えてもらったんですよ。本当にそうだなと思います。みんながそうできたら、柔らかく、丸く居られると思うんですよね。そんな会社であってほしいなと思います。

千波　「みんな平等」、そして「感謝」という言葉は、50周年に限らず、これから先もずっと残していきたいと思います。

細川　勲

北九州で仕事ができたのも、奥さんがいてくれたおかげです。奥さんが教えてくれなければ、北九州のことはよく分からなかったし、いろいろな面でそれはもうよく働いてくれました。二人で、がむしゃらに働いてきたという感じです。一緒に苦労してくれたから、今の光進工業があると感謝しています。

渡部　健治

結婚して約40年になりますが、奥さんは家庭をしっかり守り、私のことも陰ながら支えてくれています。口には出さなくても感謝しています。初代の社長、2代目の私、そして3代目の社長も夫婦円満のようですので、これからもお互いを思いやりながら、楽しく暮らしていければいいなと思っています。

細川　忠広

奥さんには「感謝」しかないですね。リーマンショックの年に社長になったとき、青年会議所の理事長もやっていましたが、奥さんがお金の工面を全部してくれて、「JCに行っておいで」と送り出してくれました。いろいろなことがあってもグチグチ言わず、大きく包んでくれている。本当に感謝です。

→ 第３章「お客様第一主義・従業員第一主義」へ

第３章　2008（平成20）年～

お客様第一主義
従業員第一主義

Third-generation TADAHIRO HOSOKAWA

3代目社長　細川 忠広

ごあいさつ

私が社長に就任したのはリーマンショックが起こった年のことで、その影響は大きく、結局、40周年は何もできずに終わってしまいました。そのころ、50周年という大きな節目を迎えることができるとは全く考えてもいませんでした。

これは、創業者である父の代から変わらないことですが、お客様からほめられたり、北九州市から感謝状をもらったりと何かいいことがあれば、それはすべて従業員の皆さんのおかげ。逆にお客様からお叱りを受けたとか何か悪いことがあれば、それはすべて社長の責任だと思っています。従業員の皆さんあっての光進工業です。

これからも、従業員の皆さんとともに地域社会に貢献しながら、100年企業を目指してまいります。

経　歴

1976（昭和51）年	北九州市に生まれる
1995（平成 7）年	日新館高校卒業後、オーストラリアの BOND大学に留学
1997（平成 9）年	光進工業株式会社に入社
2000（平成12）年	公益社団法人 ひびき青年会議所に入会
2004（平成16）年	専務取締役に就任
2008（平成20）年	代表取締役に就任
2021（令和3）年	北九州市立大学 大学院に入学（K^2BS）

第3章　お客様第一主義・従業員第一主義

海外留学の夢半ばで帰国後 光進工業に入社

細川忠広は1976（昭和51）年に、勲と文枝の長男として生まれる。地元の日新館高校を卒業後、オーストラリアのBOND大学に留学した。英語を学ぶつもりだったが、日本人が多く「留学したところがまずかった」。そこは、オーストラリア最大の観光保養地ゴールドコーストの中心にあるサーファーズパラダイスという街から車でわずか15分。街にはサーファーと観光客があふれ、日本語が普通に飛び交っていた。

1995（平成7）年　オーストラリアへ留学
観光名所 “サーファーズパラダイス”

「なので、英語を覚えるどころじゃなくて、遊びを一生懸命覚えて、1年半で大学をクビになりました」

しかし、忠広は日本に戻るつもりはなかった。友達が留学しているアメリカの大学に転校しようと、手続きのために一旦帰国した。手続きが終わればアメリカへ行き、改めて大学で勉強し直そうと考えていたのである。

空港には母が迎えに来ていた。1年半ぶりの再会に、「なにか食べて帰ろうか」と、焼き肉を食べに連れて行ってくれた。

「それはそれでおいしかったんですが、家に帰り着くと父が鯖缶を食べていて、『おぉ、おまえも食うか』と。多分、僕が帰って来たから鯖缶を開けているんですよ。なんだろうな、その鯖缶が滅茶苦茶おいしくて…。それから僕はいまだに世界一おいしいものは鯖缶だと思っています。久しぶりの日本で食べたいのは、高級なものじゃなくて、きっとこういうものなんじゃないかという、その気遣いがうれしくて…。いまだに、父のそういうところは超えられないですね」

結局、忠広はそのまま光進工業に入社した。「今も日本に一時帰国中だと思っている」と冗談めかして言うが、実際そのときは、時期を見てアメリカの大学に留学するつもりでいた。

人生を変えた 青年会議所との出合い

忠広が「僕という人間の血であり肉であり骨でもある」と語るのが、青年会議所（JC）の存在である。光進工業の3代目社長である現在の忠広は、青年会議所との出合いなくしてはあり得なかったと言っても過言ではないだろう。

ある先輩から誘われてJCの見学に行ったのは、23歳のときのことだった。

「それまで結構ヤンチャをやってる時代もあって、本当に若造だったんです。それが、青年会議所という世界が衝撃的過ぎて、今までの概念がすべて崩れ去ってしまいました」

青年会議所で学んだことは山ほどある。お金の使

い方や人との付き合い方はもちろんこと、選択に迷ったときにどちらを選ぶかも学んだ。

「人生には、右に行こうか、左に行こうかと迷うことはたくさんあると思うんです。そういうときは、『こっちに行ったら絶対きついよね』という方を選びなさいということを学んで、いまだにそれは実践しています。『絶対、こっちに行ったらきついやん、絶対寝れんやん』という道を選択して、遠回りしながらやっています」

青年会議所の先輩から言われた言葉の中でも一番心に響いたのは、「トップの人間の器以上には会社は大きくならない。なのでトップの器を大きくして、会社を大きく成長させる」だった。「おまえのお猪口(ちょこ) みたいな器量じゃあ、会社もそんなもんだろう。力士が優勝したときにお酒を飲む大盃ぐらい、おまえの器が大きくなったら、会社もそうなるんじゃないの」と言われた忠広は、「だったら、その優勝の盃ぐらいにならないといかんな」と思いを新たにする。「頑張らなければ！」と奮起するきっかけを与えてくれたのも、青年会議所の先輩だった。

リーマンショックの年に 3代目社長に就任

忠広は2004(平成16) 年に専務取締役に、そして2008(平成20) 年に代表取締役社長に就任した。2008年といえば、世界規模での景気悪化・株価下落を招いたリーマンショックのまさにその年である。

当時、青年会議所の活動に没頭していた忠広は、会社の状態をほとんど把握しておらず、「うちは小さい会社だし、アメリカで起きたことなんて関係ない」とたかをくくっていた。ところが、その年の8月9月あたりから、気づけば受注工事が全てキャンセルになっていた。

社長就任後、初の決算で3〜4千万円の赤字を出し、一気に債務超過となる。翌年も回復の兆しはなく、2期連続で多額のマイナスとなり、「もういつ会社が倒産してもおかしくない状況」に陥った。

忠広が社長を継いだころ、ほぼ同期で入社し、一緒に切磋琢磨してきた人物がいた。彼は、忠広が専務を務めていた当時、常務だった。

「『こういう大変なときだから、右腕として頑張ってね、お願いね』と協力を頼みましたが、そのわずか2〜3カ月後に突然、「辞める」と言ってきたんです。本当にショックでしたね。彼がいるから何とか乗り越えられるかもしれないと思っていたのに、要は沈没しそうな船から彼はいち早く脱出を図ったんです」

結局、その人物は辞めていった。ひどく落ち込んでいた忠広は、青年会議所の先輩に相談した。すると、返ってきたのは意外な言葉だった。

「『よかったね、おまえ』って言うんです。『その人が辞めてくれたおかげで、おまえにもっとチャンスがやってきたのかもしれんよ。いい方にとらえたほうがいいんじゃないの』と言われて、勇気をもらいました」

実際、彼がいなくなったおかげで、何事においても判断が速くなり、従業員みんなを巻き込むこともできるようになった。「もし彼がいれば、全部彼に任せていたでしょうね。それが、彼がいなくなったことで、直接、従業員の皆さんとも対話できるようになったし、先輩の言葉通り、結果的によかったと思います」と、忠広は当時を振り返る。

1995(平成7)年 事務所移転
2020(令和2) 年 朝日とともに撮影

苦しいときこそ明るく、楽しく

会社を立て直すために、忠広はある奇策に出た。

「FM KITAQというラジオ局にお願いして、毎週水曜日のお昼から1時間番組の枠を取ってもらったんです。従業員を交代でスタジオに行かせて、『なんでもいいからしゃべってこい』と。最初はみんな緊張するんですけど、そのうち『楽しかった』と言って帰って来るようになりました。だんだん従業員の笑顔が増えてきて、お客様からも『聞いたよ』といった声や問い合わせの連絡などが入り始め、気付けばちょっとずつお客様がこっちを向き始めてくれていました。会社を立て直すきっかけは、そこでつくれたと思います」

リーマンショック後しばらくは、建設業界自体に仕事がなかった。そのため、営業に行っても、みんな落ち込んで帰って来て、モチベーションは下がる一方だった。忠広は、まずモチベーションを上げるところから始めようと考えたのだ。

「明るいところや楽しいところには人が集まるだろうと勝手に考えて、会社の内部から楽しいことをやっていこうと思ったんです。その結果、お客様も『ちょっと光進工業に行ってみようか』となるだろうと、そんな雰囲気づくりに一番気を使いましたね」

社員みんなでつくりあげた
光進グループ新聞を発行

立ち直る機会つかんで

細川忠広さん(36)

歩む

受刑者を積極雇用する会社社長

2013(平成25)年 8月5日 毎日新聞 掲載

従業員の協力や周囲の助けもあって、その後、業績は回復。さらに、総合環境企業へと少しずつ進化するために、グループ企業も4社に増えた。

一方で、光進工業は「協力雇用主」として、元受刑者らを雇う活動を続けている。2015(平成27) 年には、社会復帰を目的とした更生支援寮「陽だまり寮」を建設。これは、民間企業として日本初の試みである。2019(令和1) 年には2号館を建設した。

「元受刑者の皆さんに仕事を提供するために雇い入れているところはたくさんありますが、再犯させないために雇用しているところは、うちだけかもしれません。今は母が寮の管理人を務め、食事の準備や、独り立ちのための生活指導を行っています。受け入れる覚悟をちゃんと持って支援する会社であれば、彼らは立ち直っていくと、実感させてくれています。僕の夢は、彼らの結婚式でスピーチをすることです」

創業から50年。光進工業は、地元北九州市の環境分野ではトップクラスの企業に成長した。「ここまでくることができたのは従業員の皆さんのおかげ」と、忠広は従業員への感謝の気持ちを忘れない。

これからも忠広は、「この業界で働く喜びや幸せがここにある」と言えるような「光に向かって進む企業」を、従業員と共に目指して行く。

→ 第４章「NEXT50」へ

第4章 NEXT 50

これからの50年も
光に向かってまっすぐ進んで行こう

私の社長としての経験は、リーマンショックの年にスタートしました。あのとき、何が光進工業をあそこまで傾かせてしまったのか。改めて考えてみると、見えてきたことがあります。それは、当時、解体工事と産業廃棄物処分という2本の柱しかなく、どちらも建設業の中でしかやっていくことのできない仕事だった、ということです。2本の柱で屋台骨を支えていたため、リーマンショックの影響をもろに受けて、グラグラしたわけです。

これからは、同じ建設業でも少し分野の違う柱も増やして強化していきながら、倒れない会社づくりを目指すことが必要です。私の代で、そこまでやっていくべきだと考えています。次の世代が、次の50年に向けて柱を整理し、さらに拡大していって、「光進工業という会社は100年続いたんだね」と言ってもらえる、その基礎を今つくっている最中、と言ったらいいでしょうか。

光進工業の出発点であり、現在でも中核となっているのは解体工事業です。それ以外の柱については、時代のニーズに対応して、変えるべきものは変えていっていいと思いますが、解体工事業という中核は変えるつもりはないし、将来も変えてほしくありません。もう一つ、光進工業という名前の由来でもある「光に向かってまっすぐ進んで行こう」という思いも、これからずっと受け継いでいきたいし、次の世代にも受け継いでほしいですね。光進工業は、機械やトラックなどをたくさん持っているわけではありません。そんな光進工業が、なぜお客様に選んでいただけるのか。それは、ごまかすことをせず、クレームもないからではないでしょうか。

父も母も、人をだましたりごまかしたりすることが大嫌いで、それがそのまま社名になっているような気がします。「おてんとさんにまっすぐ向かって歩けてる？」と、母からよく言われますが、そうあるためにも、仕事には絶対に背を向けてはいけないと思っています。ごまかしたり、小手先だけで済ませたりといったことを絶対にやらず、正々堂々と仕事をする。この姿勢あってこその光進工業なのですから。

父からも、ずっと言われ続けてきたことがあります。それは、「人ができることは自分もできる」。実際、父自身も、「人がやっている仕事なら俺もできる！」と信じて仕事をしてきたようです。私もこの言葉をモットーに、「今、自分にできることは何か」を、常に自分に問い続けています。

光進工業が今後どれだけ大きくなろうと、偉いのは創業者の細川勲であって、それ以外は全員フラットです。この先、創業者のことをまかり間違っても見下すようなことを言う社長が出てきたら、その時代で光進工業は終わるだろうなと私は思っています。今回の50年史を通して、創業者、そして2代目、3代目はこんな思いで50年間やってきたということを分かってほしいと思います。

50年史は、次にきちんとバトンを渡すための光進工業の歴史書でもあるのです。

→ 第５章「社員より５０周年を迎えて」へ

－KOUSHIN MISSION－

エコ屋としての自覚を持ち
社員みんなで目指す
「リサイクルのない街づくり」が
私たちの最終目的地です。

ドローン撮影：光進工業株式会社 上空にて

第5章 社員より50周年を迎えて

社員より光進工業へメッセージ

工場長 **園邉 光浩**（2006年 入社）

重機のオペレーターとして入社した私が、工場長になりました。職人肌なので管理は無理と思っていましたが、社長や従業員のみんなに助けられてここまでくることができました。会社には、言葉では言い表せないほどの恩があります。感謝の気持ちでいっぱいです。若い従業員たちが将来、光進工業の柱となって会社を発展させてくれるように、彼らを育てていくことが恩返しだと思っています。

輸送事業部 部長 **橋本 正孝**（2008年 入社）

輸送事業部を立ち上げることになったとき、現在の部長職に就かせていただきました。当初は右も左も分からない状態でしたが、おかげで我慢強くなったし、成長もできたと思います。こういう責任ある立場をいただいたことも含めて、50周年を迎えた光進工業で仕事をさせてもらえることに感謝です。100周年を迎えることを目標に、後進を育成しながら、仲間と一緒に頑張っていきたいと思います。

建設事業部 部長 **阿部 知之**（2013年 入社）

光進工業は「全員野球」の会社です。失敗した時はいろいろな部署の人たちが助けてくれるし、困ったときは協力してくれるので、一つの現場を完了することができるのだと思います。もちろんそこには責任が伴いますが、仕事をする上で自由に自分を表現させてもらえるのは、社長をはじめ上司の懐が深いからだと感謝しています。100周年を目指せる会社になるよう、これからも頑張りたいです。

輸送事業部 ドライバー　若狭　和久 (2013年 入社)

ドライバーとして、日々、無事故無違反で時間内に仕事をこなすように努めています。寮のリーダーとしては、みんなをまとめて一緒に成長していくことにやりがいを感じています。光進工業に入って初めて、たくさんのかけがえのない仲間ができました。今の自分があるのは、光進工業との出会いがあったからです。50周年の節目に、みんなと一緒に仕事をすることができて光栄に思っています。

事務・受付　齋藤　郁実 (2012年 入社)

入社したとき、「受付は光進工業のスタート」と言われました。自分の対応一つで会社に対する印象が変わると思うと、自然と気が引き締まります。いつも笑顔で丁寧な対応を心がけていますが、お客様からは「会社の雰囲気が明るい」と言っていただきます。アットホームで一体感があるのは社風であり、会社としての強みでもあります。自分の勤めている会社が光進工業で本当によかったです。

事務　金子　マユミ

監査役(細川文枝さん)とは、子どもの小学校の役員をしていたときに知り合い、仕事を手伝うようになりました。まだリサイクル事業を始めたばかりで、手づくりのチラシを配ったり、監査役と二人で下関まで営業に行ったりしたものです。リサイクル事業はもちろんですが、特に福祉事業は誰もができることではないので、社長には相談役と監査役の意志を引き継いで、長く続けてほしいですね。

伊東　岩男・浅子

1998年から夫婦でパートとして働いています。もう高齢なので辞めようと思った時期もありますが、監査役から「元気なうちは辞める必要はない」と言ってもらいました。和気あいあいとした家庭的な会社で、夫婦そろって20年以上も働くことができて幸せです。細川忠広社長はたくさんアイデアを持っているので、これからもいろいろなことに挑戦して、会社をさらに発展させてくれるものと期待しています。

思い出アルバム 社員旅行編

思い出アルバム 仕事編

2019 第42期 全体会議

2004 キャタピラー製品ご愛顧感謝式

2019 北九州市認定 産廃優良事業者

2016 福岡ひびき経営者賞

2018 感謝状授与式

2013 消化器訓練

2011 避難訓練

2011 工場見学会

2019 重機安全講習

年に2回の献血活動

2014 北九州市主催
市民いっせいまち美化 清掃

創業時の事務所

ボルクバレット北九州 シルバーパートナー

2013
地域で育てよう少年たちの未来 表彰式

光進工業の車両たち

1988(昭和63)年
MS280を中古車購入

光進カラーの
ブルーに塗り替え

思い出アルバム お楽しみ編

1988 忘年会

1988 太栄会ゴルフコンペ

2014 24時間TVチャリティー

2017 ボウリング大会

2011 もちつき大会

2017 忘年会

2010 BBQ

2015 ボウリング大会

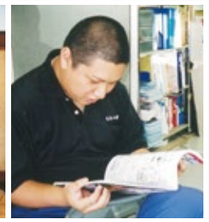
2016 忘年会

2021 もちつき大会

2015 忘年会

2012
BBQ

2021 50周年記念会



2013 じゃがいも収穫

2018 納涼会

小倉イルミネーション2019

廃タイヤの
エコプランター

資料編

光進工業株式会社
グループ企業紹介
・有限会社CLG
・有限会社テラ
・たくみ工業
・秀健商事

光進工業株式会社

代表取締役　細川　忠広

TADAHIRO HOSOKAWA

光進グループで「総合環境企業」を目指す

■ 会社概要

名称	光進工業株式会社
住所	福岡県北九州市小倉北区西港町125-8
TEL	093-581-7046
FAX	093-581-7007
資本金	20,000,000 円
代表取締役	細川　忠広
取締役相談役	細川　勲
取締役部長	細川　千波
会長	渡部　健治
監査役	細川　文枝
監査役	岩本　政明（外部）
監査役	山田　忠政（外部）
顧問	宮城　義宣（外部）
顧問	鏑水　裕介（外部）

■ 事業品目

一般建設業【 許可第10979号 】

解体工事業　土木工事業　建築工事業　とび･土工工事業

運送業

一般区域貨物自動車運送事業【九運自第 2065 号】

産業廃棄物処理業

産業廃棄物中間処理業【許可第 07620008204 号】
・廃石膏ボード・ガレキ類・廃プラスチック類
・紙くず・発泡スチロール・ガラスくず・木くず

収集運搬業

産業廃棄物	福岡県【許可第 04000008204 号】 山口県【許可第 03500008204 号】 佐賀県【許可第 04101008204 号】 熊本県【許可第 04305008204 号】 大分県【許可第 04408008204 号】
一般廃棄物	北九州市【北九一廃第 177 号】

その他　認定

・エコアクション 21【登録番号 0008526】
・子育て応援宣言登録証【福岡県第 4141号】
・北九州環境自慢認定証（ 廃石膏ボードリサイクル製品 ）
・リサイクル認定 (RC-40)【第 072020405号】
・リサイクル認定 (RM-25)【第 072020304号】
・産業廃棄物中間処理業優良業者（ 平成 15 年 / 平成 20 年 ）
・飲酒運転撲滅宣言企業登録証
・遺品整理士認定
・遺品整理優良事業所認定

エコアクション 21®
認証番号 0008526

有限会社 CLG
Come to the Laughing Gate

代表取締役 **松永　佐知子**

SACHIKO MATSUNAGA

お客様と会社を笑顔でいっぱいに

造園、ハウスクリーニング、光進工業の工場の一部を業務させていただいています。CLGの名前の由来は、英語で「Come to the Laughing Gate」訳すと「笑う門には福来る」です。この精神で、会社を笑顔でいっぱいにして、お客様を増やしていきたいと思っています。それにはまず、自分たちが笑顔でいられる、そんな職場の環境づくりを大切にしていくことが必要です。そして、光進工業という大きな柱を支えていけるようなグループ企業の一つとして、これからも頑張っていきます。

■ 事業品目

美装部門

空室清掃・リフォーム清掃・定期清掃・部分清掃・全館清掃
下水管清掃・除菌・新築美装・リフォーム美装
片付け一人暮らしサポート・終活生前整理・遺品整理
不用品回収・古物販売

造園部門

剪定　除草　消毒　施肥　伐採　植栽

工場部門

分別作業

販売部門（建設資材の販売）

RC-40・RM-25・KRB-30・再生石膏粉・生コン

管理部門

グループ企業関連広報

お片付けサポート

部分清掃

フローリング美装

除草

■ 会社概要

名称	有限会社 CLG
住所	福岡県北九州市小倉北区西港町125-8
TEL	093-562-5890
FAX	093-581-7058
資本金	5,000,000 円
取締役会長	細川　忠広
代表取締役	松永　佐知子
取締役	池田　将臣
監査役	細川　千波

■ 会社沿革

1982（昭和57）年06月	資本金 500 万円で有限会社池田工業を設立
2014（平成26）年10月	全株式を光進工業株式会社へ有償譲受
2015（平成27）年04月	代表取締役に松永佐知子 就任
06月	販売部門の営業開始
07月	造園部門の営業開始
10月	リフォーム部門の営業開始
2017（平成29）年08月	管理部門の営業開始
2019（令和元）年07月	社名を有限会社 CLG に変更
2020（令和２）年01月	美装部門の営業開始
07月	工場部門の営業開始
	障がい者・就業困難者就労支援事業 開始

有限会社 テラ
Creating the Future

代表取締役 **藤本　倫康**

NORIYASU FUJIMOTO

匠の技術と丁寧な施工で
安心安全な交通施設を遺し社会に貢献する

2020（令和2）年7月に光進グループに仲間入りしました。会社としてのビジョンはまだ模索段階ですが、光進グループ全体の売上高アップにどれだけ貢献できるかが重要になります。既存の交通安全施設の設置工事や、防護柵設置工事だけでなく、それに付随して、北九州市のスマートシティ構想などにうまく参画できれば、面白い展開になるのではと思っています。以前、自動運転の研究をやっていた経験を生かして、ぜひ挑戦してみたいと考えています。

■ 事業品目

区画線（ライン）工事

・視線誘導として重要な役割を果たす区画線工事

防護柵設置工事

・道路環境にあった防護柵の設計設置

薄層カラー舗装工事

・薄層カラー舗装工事による路面の機能デザイン化

標識設置工事

・様々なタイプの標識を設計施工

■ 会社概要

名称	有限会社テラ
住所	福岡県北九州市小倉北区西港町125-8
TEL	093-583-3477
FAX	093-583-3478
資本金	5,000,000 円
代表取締役	藤本　倫康
取締役	細川　忠広
取締役	酒井　信太郎

■ 会社沿革

2003（平成15）年07月	有限会社テラ設立
2004（平成16）年12月	本店を小倉北区西港町89-10に移転
2007（平成19）年03月	本店を小倉北区西港町62-1に移転
2020（令和2）年07月	光進工業株式会社のグループ企業となる
	代表取締役に藤本倫康が就任
	本店を小倉北区西港町125-8に移転

たくみ工業

代表

細川　文枝

FUMIE HOSOKAWA

会社の担い手となる寮生を育てる

光進工業は「陽だまり寮」という独身寮を持っていて、2019(令和元)年5月に2棟目ができました。たくみ工業は、その寮全体の管理・運営を行っています。

私生活がきちんとしていれば、仕事もきちんとできるというのが私のモットーです。寮生の私生活を母代りとして、口うるさく見守りながら、一人でも多く、光進工業の担い手となるような寮生を育てていくのが仕事だと思っています。寮生が高齢になっても楽しい共同生活ができるような、そして誰もが入りたいと思うような、そんな寮を目指しています。

■ 事業品目

陽だまり寮（1号館・2号館）の運営

寮生の生活指導・コインランドリー運営

ダイニング和～なごみ～の運営

寮生の朝夕の食事・仕出し弁当

■ 会社概要

名　　称	たくみ工業
代 表 者	細川　文枝
創　　立	平成 26 年 4 月
所 在 地	福岡県北九州市小倉北区日明5丁目5-28
TEL/FAX	093-967-7545

2015(平成27)年「陽だまり寮1号館」建造

2019(令和元)年　「陽だまり寮2号館」建造

期限なし 更生支援寮

元受刑者ら向けに建設

北九州の解体業者

2015(平成27)年 5月17日 西日本新聞 掲載

秀健商事

代表

渡部　健治

KENJI WATABE

光進工業での経験を生かした事業展開を

光進工業の中で鉄以外の、銅や真鍮・アルミニウムといった非鉄金属の精選・販売と、北九州市から委託されている工事部門の管理監督を行っています。

まだまだ伸ばせる分野はたくさんあります。私自身が光進工業の工事、経理などすべての部門を経験しているので、それらを生かして、毎年の社会情勢を見ながら、秀健商事を成長させていきたいと思っています。同時に、母体である光進工業がさらに成長できるよう、他のグループ企業と協力していきたいと考えています。

■ 事業品目

非鉄金属の取り扱い（精選・販売）

空き家・空き地の管理、空き家・空き地の不動産管理

遺品整理業・ブロック工事・レンガ積み・カーポート設置

■ 会社概要

名　　称	秀健商事
代 表 者	渡部　健治
創　　立	平成 27 年 3 月
所 在 地	福岡県北九州市小倉北区日明5丁目3-8

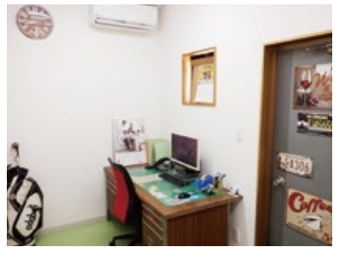
非鉄金属の出荷作業

リフトでのアルミ積み込み

プラッター銅線分別作業

作業場での分別作業

重機作業での解体分別



2020(令和2)年 事務所新装
2021(令和3)年 遺品整理 開始

それぞれの時代を支えてくれた物故者を偲ぶとともに心から感謝いたします

今仁　傳

蔵本　一夫

郷田　スミエ

細川　一男

渡部　直留

豊田　直

鈴木　典彦

光進工業の50年、それは社員の皆さん一人ひとりの力の結集でもあります。なかには、在職中、あるいは退職後に亡くなられた方もいます。

まだ解体工事そのものが広く認知されていなかった時代に、共に汗を流し、光進工業の基礎をつくってくれた方。リサイクル事業にいち早く取り組んだ時代から今日まで、光進工業の新たな道を共に切り開いてくれた方…。それぞれの立場から、光進工業を支えてくださいました。全員ではありませんが、代表して7名の写真を掲載させていただきました。

皆さんは光進工業にとってかけがえのない大切な存在であり、これからも皆さんが遺した足跡は光進工業の歴史の一部であり続けます。

50周年を共に迎えることができなかった方々に、改めて敬意と感謝の意を表します。

Give gratitude.

父の遺志を継ぎ、父を目標に。

大学卒業後、何度か転職を経験したのち、学生時代からアルバイトに来ていた父の勤める光進工業に入社しました。しかし、父とともに働いた日々は、2019年3月、突然終わってしまいます。父はまだ56歳、あまりにも早過ぎる別れでした。父は環境事業部ガレキ工場の主任で、仕事になると本当に厳しい上司でした。整理整頓の大切さから、重機の使い方、乗り方など、たくさんのことを教わりました。父の統率力や判断力はすごかったと、今、改めて感じているところです。父が偉大だっただけにプレッシャーも半端ではありませんが、父の遺志を継いで、いつの日か父のようなまとめ役をしてみたいと思っています。20代から人工透析をしていた父に働く場を与えてくれた光進工業に、父は感謝していたに違いありません。僕も父が導いてくれたこの会社で、父に感謝しながらこれからも頑張っていきます。

環境事業部　重機オペレーター　**鈴木 敦也**

編集後記

この度、光進工業株式会社 創業50周年を迎えるにあたり、社史を発行する運びとなりました。

はじめに社史のお話をいただいた時は、軽い気持ちで編纂委員を受けましたが、打ち合わせを開始し、たくさんの資料や歴史にふれ、現在に至るまで数々の道のりを乗り越えてきたことなど、初めて知る事が多く、改めて50周年の重みを感じ、その責任の重さをひしひしと感じました。

本誌を制作するにあたり苦労したのは、世界中を恐怖におとしいれた未知のウィルス「新型コロナウィルス」でした。目に見えないウィルスとの戦いの中での制作は、思う様に密に制作作業を進めることが出来ず、予定していた段取りが延期になったこともありました。そんな中、たくさんの方々のあたたかいご支援とご協力をいただき、本誌が形になった時は、感慨深いものでした。この大変な時代に50周年を迎えたという貴重な経験は、必ずや今後の発展の糧になるはずです。

最後になりますが、本誌編集業務に携わることが出来た事に深く感謝するとともに、一緒に作りあげていただいた50年史制作協力の東京経済株式会社様、株式会社 IMVAST様、C.O.League様、KM Photo Office様に感謝申し上げ、編集後記とさせていただきます。

令和３年４月 吉日

50年史編纂委員長　玉井 和美

- 付属 DVD について -

光進工業 50 年史をスペシャル映像作品（約 70 分）にいたしました。
ご覧いただければ幸いです。

光進工業株式会社 50年史「光に向かって進む企業へ」

発 行 日　2021年５月1日
発　　行　光進工業株式会社
〒803-0801 北九州市小倉北区西港町125-8
TEL 093-581-7046
題　　字　北九州市立 戸畑障害者地域活動センターの皆さま

編　　集　50年史編纂委員会
制作協力　東京経済株式会社
株式会社IMVAST
C.O.League
KM Photo Office